浮舟物語と住吉物語

藤河家利昭

枕草子や源氏物語に見える所謂古本住吉物語の内容は、ほぼ現存住吉物語によって窺い知ることが出来るようである。[注1] それは、母なき宮腹の姫君が継母の迫害によって住吉に逃れるが、長谷観音の利生によって尋ねて来た男君とめでたく結ばれるという物語である。源氏にも「住吉の姫君の、さしあたりけむ折はさるものにて、今の世のおぼえもなほ心ことなめるに」(螢巻)とある程著名であり、その構想は光源氏の須磨流謫や玉鬘の流浪の物語にも影響を与えていると言われる。[注2]

さて浮舟物語は住吉物語の人物や構想に依拠しながらそれを大きく改変して浮舟の数奇な物語を形成していったと考えられる。ここでは浮舟入水に至るまでのこの物語の前半の部分に限って、浮舟をめぐる人物関係、特に母中将君との関係について、[注3] それが住吉の姫君をめぐる人物関係、特に父中納言や継母との関係をいかに受け継いで、結婚の破局によって入水に至る物語の必然的情況を設定し得たか、その跡をたどってみたい。この二つの物語は住吉と宇治という地名が目ずと〝住み良し〟と〝憂し〟を連想させるように対立的であり、幸福な結婚の物語に対して不幸な結婚の物語として、浮舟物語は住吉物語の幸福な結婚の成立条件を根底から問い直したものだと考えられるのである。

ここで住吉物語と源氏物語との対応を考えていく場合、現存本によって古本住吉の内容を推測するという方法をとりたい。その際現存本にあることが古本にもあったかどうかは分らないが、基本的には大きな違いがなかったと見られること、また源氏との緊密な対応があれば古本にもそれがあったであろうと考えられることなどを一応の前提としたい。

一、故八宮と故母宮

故八宮が生前に中将君母娘に対してとった処置は、浮舟の将来にどのような意味をもつだろうか。

弁尼が人伝に聞いた話として薫に語ったところでは、八宮がまだ京に住み、北の方の死後間もない頃、中将君という上臈の女房に人目を忍んでほんのちょっと情をおかけになったのを誰も知らなかったが、

女子をなむ産みて侍りけるを、さもやあらむ、と思す事のありけるからに、あいなくわづらはしくものしきやうに思しなりて、またとも御らんじ入るる事もなかりけり。

(宿木・六・二〇二) [注4]

宮はそれに懲りてそのまま殆ど聖になってしまわれたので、彼女は

邸に居られなくなり、陸奥守の妻になって下ったが、

一年のぼりて、その君たひらかにものし給ふよし、このわたりにもほのめかし申したりけるを、きこし召しつけて、さらにかかる消息あるべき事にもあらず、とのたまはせ放ちければ、かひなくてなむ歎き侍りける。（同）

宮は女の子が生まれたことで、中将君と関係をもったのが北の方の死後間もない頃のことではあり、また上臈とは言え女房風情と人知れず関係をもったことを厭い、世間を憚りもしたのであろう。そして成長した浮舟とその母を遠ざけたのは宮家としての体面を守るとともに、大臣の娘であった故北の方の姫君たちとの間にけじめをつける必要もあったからであろう。[注5]

これは住吉物語の故母宮の場合とまさに対照的である。母宮は姫君が八才の時病死するが、そのとき父中納言に次のように遺言している。

我はかくなりなは、このおさなきものゝため、うしろめたうなん、侍へき、我なからむあとなりとも、なみ〳〵ならむ、ふるまひ、せさせ給ふな、いかにも〳〵、御門に、たてまつらせ給へ、ことむすめたちに、おほしおとすなと、なく〳〵きこえ給へは、（住吉物語・六九）[注6]

姫君の入内は結局実現しなかったが、その行末を深く案じた故宮の愛情はこうして中納言にも受け継がれることになる。また姫君の乳母や住吉の尼などは姫君の母代りとして、或は生前の宮に深い縁のあった人として、姫君を苦難から守り、解決の手助けをする。従って姫君の幸福な結末に至る道筋は、物語に底流する故宮の遺志にそってたどられると言ってよい。逆に言えば姫君の幸福な結末ということは殆ど無条件に容認されていると言えるのである。

では住吉物語においてはどうしてそのような前提が据えられたのだろうか。中納言と故母宮の結婚の経緯は次のようであった。

いまひとりは、ふるき御かとの、御むすめにておはしける、いかなるすくせにて、此中納言、よな〳〵、かよひ給ふほとに、やかて、人めもつゝますなりて、住わたり給けるか、ひかるほとの女君、いてき給ける、おもひのまゝなれは、おほしかしつき給こと、かきりなけれは、（同）

中納言が通うようになったとき、姫宮には已に父帝も母后もなく荒れていく宮邸を守ってひっそり暮らしていたのであろう。中納言との仲が睦じくても、古い帝の皇女とは言え臣下の中納言程の人と結ばれること、しかもそれがひそかに始められたらしいことなど、母宮としては我身の没落をかみしめるときがあったに違いない。姫君を帝に奉れという遺言はこういった事情を裏書きするようである。

さらに中納言にはそれ以前に「時めく、しょ大夫のむすめ」という北の方があり、その腹に姫君が二人あった（これは宮腹の姫君より後に生まれたらしい）。母宮が病死するようなことになったのも、中納言との結婚が正式のものでなかったことに加えて、前の北の方の後見に実力があって母宮の方が圧迫されるといったことが原因になったかと考えられる。いわば物語の前史として故宮の不幸な結婚とその結果としての死があり、その代償として姫君の幸福な結婚は当然もたらされねばならなかったのである。

住吉物語は継子いじめを一つの重要なモチーフにしていたであろうが、その根本的原因は母の時代の妻同士の対立・葛藤にあり、それは娘の時代になっても持ち越され姫君と継母との間に新たな対

立・葛藤を引き起こすことになる。さらにそれは母の時代の妻同士の争いが娘の時代においては姫君と継母の娘との間の夫争いに形を変えていると見ることも出来る。このように故母宮の遺言は姫君の幸福な結末を約束するものであると同時に、姫君をとりまく現実の危機的情況をふまえてなされているのであった。

八宮には浮舟の行末について考えるところがなかった。しかし宮が浮舟の生まれたことで中将君と関係をもったことを悔いて殆ど聖のようになってしまったと語られるとき、それは宮自身の生き方であるよりもむしろ浮舟の生き方の前史としてその行末を暗々裡に規制するものだったのではなかろうか。少くとも浮舟が宮の子として認められなかったことは、結局浮舟の出家という結末の重要な前提であったと考えられるのである。

八宮を父としながら娘として認められなかったことによって浮舟は落魄と漂泊の境涯に沈むことになる。浮舟をめぐって次々と持ち上がってくる不幸な事件、左近少将の鞍替え、匂宮の接近、さらに薫との結婚までもが、いずれも浮舟の地位を軽視した結果であった。母中将君は宮の子として認められないという如何ともしがたい事実をあえて踏み越えようとするが、それがかえって浮舟を破局に陥れる遠因となってしまう。こうして宮のとった処置は浮舟の運命に重大な影響力をもつことになるのである。

このように住吉物語の故母宮と浮舟物語の故八宮とはその父と母の立場が入れ換わっているというだけでなく、女主人公の運命への関わり方が全く異なっている。しかしそれがいずれの方向であってもその運命に大きく関わっているという点は同じであり、浮舟物語は住吉物語の物語的基盤を継承し発展させていると言えよう。

浮舟物語はこのような独自の設定をもって始まるのであるが、その物語的契機はどこにあったのだろうか。二条院の中君の許に身を寄せていた浮舟に匂宮が近づくという人聞きの悪い事件が起きたとき、乳母が慰めて次のように言う。

「何かかくおぼす。母おはせぬ人こそ、たづきなう悲しかるべけれ。よそのおぼえは、父なき人はいとくちをしけれど、さがなき継母に憎まれむよりは、これはいと安し。

（東屋・六・二七二）

案に相違して父のない浮舟に対する世間の扱いが低いために不幸な出来事は起こったのである。[注7] 作者には継子いじめの物語を下敷きにして新たに母はあるが父のない女主人公の独自の運命に取り組もうとする意欲があったようである。已に母がなくやがて父をも失う大君・中君の暗い運命を語ってきた作者にとって、これは残された最後の課題だったのであろう。そして同じ八宮家の姫君たちの悲劇ではあるが、父から深い慈しみを受けた大君・中君に対して、父から認められなかった浮舟の物語は外伝的な性格をもたされるのであって、それは浮舟の数奇な運命を最大限に展開させ得る恰好の場を与えることになったのである。

二、中将君と中納言

中将君は浮舟が八宮に顧られなかったのでそれだけ浮舟の行末を深く思い案じることになる。

物語は先ず中将君が後妻となつた常陸守の邸で連れ子である浮舟がどのような位置に置かれているかということから始められる。守には先妻の子など多くあって、中将君の腹にも姫君と呼んで大事に

するのがあり、まだ幼いのなど、次々に五六人あったので、

さまざまにこのあつかひをしつつ、他人と思ひ隔てたる心のありければ、常にいとつらきものに守をもうらみつつ、いかで引きすぐれて、おもだたしき程にしなしても見えにしがな、と、あけくれこの母君は思ひあつかひける。（東屋・六・二三二）

また浮舟が他の子に比べて、

同じごと思はせてもありぬべきを、物にもまじらず、あはれにかたじけなく生ひ出で給へば、あたらしく心ぐるしきものに思へり。（同）

中将君には、守が浮舟を隔てているので面目ある所に縁づけて見返してやりたいと思うとともに、浮舟が紛れもなく宮の血を引いて際立っているので守の子と同じように見られたくないと思う、というように矛盾とも思える心があった。それは守の実子でもなく、さりとて宮にも認められない浮舟の中途半端な立場によっているのであった。

このような母中将君の心情は住吉物語の父中納言のそれに似ている。

中の君、三の君は、とり〳〵に、いとにほひやかに、なへてのにはあらぬ、御けしきなれと、ひめ君は、いまひとしほ、にほひくはゝりて、ひかるなとはこれを申にやとそ、見え給ける（住吉物語・七二）

中納言、我も、をこたるときなけれとも、北のかたに、聞えあはせむに、我子ならねは、おなし心に、いそむかむ事も、かたけれは、いひも出すとて、おもひわつらひ給ひけり（同・七三）

宮腹の姫君を他の娘たちといっしょに住ませてみるとその美しさは一段と増さっていると思われるが、入内をと思っても継母のために思うようにならないのである。

中将君は浮舟の相手として左近少将を決めていたが、少将は浮舟が守の子でないと知って実の娘に鞍替えしてしまう。彼女は初め少将などという身分の男と結婚させるのも惜しく、八宮に認められていたら薫とのことも思い立ったのになどと思っていた。

されど、内々にこそかく思へ、外の音聞は守の子とも思ひわかず、また賓をたづね知らむ人も、なかなかおとしめ思ひぬべきこそ悲しけれ、など思ひ続く。（東屋・六・二四四）

実際にはこの事件によって結果的に守の子より低く扱われたということになったのであり、彼女としては思いがけない相手から浮舟の親のない悲しさを思い知らされたのである。こうして浮舟は先ず継父との関わりを事実上断つことになったのであり、それはまた浮舟の出家に至るための一前提であったとも言えよう。

この事件の後も中将君は乳母の勧める薫との結婚にすぐには踏み切ることが出来なかった。

上達部親王達にて、みやびかに心はづかしき人の御あたりといふとも、わが数ならではかひあらじ、よろづのことわが身からなりけり、と思へば、よろづに悲しうこそ見たてまつれ。いかにして、人わらへならずしたてたてまつらむ」とかたらふ。（東屋・六・二四八）

八宮や常陸守との結婚生活から導かれたこの判断は強い根拠をもっているのであるが、それが不幸にもそのまま浮舟の結婚生活にもあてはまることになる。そして相応と思われた少将との結婚が不首尾に終わったことでもあり、なおのこと薫との結婚は困難が予想される情勢にあったのである。

この事件は、住吉物語の継母が故宮腹の姫君の許に来た四位少将（古本の侍従）の縁談を自分の腹の三君の方に横取りしたことに想を得たものであろう。ただ浮舟物語では常陸守が横取りしたというよりは、左近少将が浮舟を守の娘でないと知って鞍替えしたからであるが。住吉物語ではこの継母による婿の横取りということがそれ以後の姫君と少将との関係を強く拘束するように、浮舟物語でもこの事件は浮舟の運命を大きく変える原因となった。ただこれは浮舟自身には殆ど関わりなく、母中将君の浮舟の行末に対する判断を誤らせることになるのである。そしてそれは住吉物語が入内から宰相との結婚へと難から易へという方向をとっているのに対し、浮舟物語では左近少将との結婚から薫との結婚へと易から難へという方向をとっていることによって如実に示されるのである。

中将君は思いあまって浮舟を二条院の中君の許に預けるが、彼女が常陸守邸に帰っている間に匂宮が浮舟に近づくという事件が起きる。中君と浮舟の間柄からしてもきわめて人聞きの悪い出来事に驚いて、彼女は自分から進んで預けたにも拘らず急いで浮舟をかねて用意していた三条の小家に移す。

君はうち泣きて、世にあらむこととところせげなる身、と思ひ屈し給へるさま、いとあはれなり。親はたまして、あたらしく惜しければ、つつがなくて思ふごと見ななむ、と思ひ、さるかたはらいたきことにつけて、人にもあはあはしく思はれ言はれむが、安からぬなりけり。心地なくなどはあらぬ人の、なま腹立ちやすく、思のままにぞすこしありける。

（東屋・六・二八〇）

これはやがて浮舟巻の匂宮事件に発展するのであるが、彼女のこの出来事に対する反応の仕方はきわめて性急で一方的であり、匂宮事件が起きたときの彼女の態度を予測させるものがある。またここで初めて、その一端ではあるが身の上を思い歎く浮舟の姿が示されていることが注意される。この事件の後、中将君は匂宮の人を人とも思わぬ行為に反感をもち奥ゆかしい薫との結婚を思うが、その一方で浮舟は三条の物寂しい仮住居で匂宮を恐れながらもその印象を心に深くとどめていたのであって、母と娘の背反は各々の内面において秘かに用意されていた。とはいえ後の匂宮事件の原因を作ったのは他ならぬ中将君だったと言えるのである。

この事件は、住吉物語では姫君の入内が取り止めになるもとになった六角堂の別当法師を通わせているという継母の偽言に相当するであろう。しかし古本住吉物語では恐らくそのような内容ではなく、六角堂の別当という人物は後の七十許りの主計頭という老翁とも関わりがあるようで、法師ということで姫君により大きな恥をかかせるという効果を考えて現存本の作者が変えたのではなかろうか。元は妻争いの物語であって、[注8] 主人公の侍従（現存本の四位少将）に対する副主人公の蔵人少将が姫君の入内の近いことを知って（或は侍従も姫君に思いを寄せているのを知って）事ならぬうちにと思って姫君の部屋に忍び込んだのを継母などに発見されたのではないかと思われる。それが父に対しても中傷されて、また蔵人少将は姫君と異腹の兄妹でもあったので[注9] 父の怒りを買い、入内も取り止めになったのであろう。これは次いで起こる姫君と侍従との関係が結果的には三君の夫を取るということになるので、継母や三君は言うまでもなく父に対しても顔向けが出来なくなるという深刻な事態を予想させるのである。その父との背反を避けるべく姫君を

主計頭に取らせるという継母の計略が構えられたのだと思う。最後で父が二人を認めるのは（実はその時初めて知ったのであるが）、継母の悪事が露見したからである。現存本では継母の中傷、迫害によって家を追われるという色合いが濃いが、古本ではこのように姫君をめぐる人間関係の葛藤の情況を写すことに比重があって継母の役割は軽かったと考えられる。

こうして父との決定的な背反は回避され、将来の姫君の幸福は保証されることになる。四位少将（侍従）との結婚も中納言の宮腹の姫君であることによって公認されるのであって、変わらぬ愛情をそそぐ父の存在は故母宮と並んでこの物語を成り立たせるもう一方の支柱であると言えよう。中納言は古い帝の御子であった母宮の許に秘かに通うようになったが、元の妻との間に葛藤があったのか結局病死させるようなことになったので故母宮に対して深い負い目があったであろう。さらに故母宮の遺言もあり、また姫君が皇族の血筋を引いていることへの心苦しさもあり、姫君に深い慈しみをそそぐことになる。そしてそれは姫君がきわめて不都合な事件に捲き込まれたときも殆ど変わることはないのである。

しかしその反面、父中納言の苦心して行う入内準備、或は宰相との結婚準備などいずれも継母の嫉妬と反感を買い、中傷や妨害が加えられるが、中納言はそれを全く知ることがない。[注10] これは言うまでもなく姫君の置かれている情況の悲劇性を高めるべき物語の制約上知ってはならないのである。そのため姫君としては父に対する恥ずかしさはもとより、父の深い愛情を二度までも裏切りかねないという苦しみや父の体面を汚すことにもなるという恐れがある。しかも継母が力を持っているので事実を打ち明けることもならず、父に顔向けが出来ないながら堪え忍ぶ他はない。そして遂に父に深い歎きを与えることを思いつつも父に背いて家を出なければならない。父もまた姫君をどの娘よりも慈しんでいながら遂に姫君の苦しみを知り、これを救うことは出来ない。初めからしばしば父が姫君を慈しみ、姫君も父を慕う様が描かれるのはこの別離の悲しみを強調するためと言ってもよい。このようにここで父と娘の間は最も強い絆で結ばれていながら、心を通わせることが出来ずに別れていく者の悲劇となっているのである。そこに父と娘を追いやるのが他ならぬ継母ということであって、そのさがなさが引き立ってくることになるのである。住吉物語の元の結構は男女の恋を中心とし、それを妨げるものとして継子いじめを絡ませたと言われるが、それが世にもてはやされたのは家庭内の様々な人間関係によって引き起こされる心理的葛藤が精彩をもって描かれていたことがその理由の一つだったのではなかろうか。

以上をまとめると、古本住吉物語では妻争い（侍従、又は帝―姫君―蔵人少将）と夫争い（姫君―侍従―三君）をプロットにしていて、それに前者では兄妹、後者では姉妹の関係が絡んで葛藤を強めていたと見られる。そして住吉では後者の姉妹同士の夫争いに中心があって深刻な悲劇となっていたのである。これに対して浮舟物語では夫争い（浮舟―左近少将―女童）と妻争い（薫―浮舟―匂宮）をプロットにしていて、それに前者では姉妹、後者でも姉妹（匂宮を中心にすれば、中君―匂宮―浮舟、となる）の関係も絡んでいるが、姉妹同士の対立は余り問題になっていない。ここでは後者の妻争いに中心がある。このように住吉の夫争い、浮舟の妻争い、と両者は中心の置き方が違うわけである。しかし住吉物語がもってい

た、夫争いによって引き起こされる継母と三君、或は父との心理的葛藤のような家庭内の人間関係が作り出す情況もやはりかたちを変えて受け継がれていると見られる。それは危うくすると姫君の幸福を根底から覆してしまうものだったのであり、逆に言えば住吉物語がそのような危機をはらんでいるからこそ緊張を持続しうる物語となったのである。浮舟物語が妻争いに中心を置いたのは、身分の低い浮舟に住吉物語よりもはるかに高貴な二人の男を配して葛藤を強め、それが母中将君の思わくに決定的に背くものであり、浮舟をめぐって起こった浮舟の立場(母をも含めた)を軽んじた人聞きの悪い事件の最たるものであったことによる。それはもとはと言えば中将君の処置の誤りによるものではあったが、結果的には母の懸命な願いを裏切ることになったのである。こうした母の存在は浮舟の出家を決定的にする要因とならざるを得ない。

三、中将君と継母

次に、中将君が浮舟の行末についてとった処置は、その人柄のゆえもあってかえって浮舟に不幸な結果をもたらすことになった。

左近少将に鞍替えされたことに反撥した中将君はかねて浮舟の不安な身の上を訴えていた中君を頼る。

この御方ざまに、かずまへ給ふ人のなきを、あなづるなめり、と思へば、ことにゆるい給はざりしあたりを、あながちに参らす。　(東屋・六・二五一)

いくら浮舟にしっかりじた後見がないとはいえ、固く差し止めを受けている八宮のあたりを無理に頼る無分別と、

われも故北の方には離れたてまつるべき人かは、仕うまつると言ひしばかりに、かずまへられたてまつらず、くちをしくてかく人にはあなづらるる、と思ふには、かくしひて睦びきこゆるもあぢきなし。　(同・六・二五二)

結局は宮に仕えたという身分でしかないのであるが、自分も故北の方に無縁の人ではない(姪にあたる)と身の程を弁えず強いて近づく身勝手が非難される。

これは住吉物語の中納言が姫君の入内や宰相との結婚をはかることに対して、継母が中傷や計略を構えるところを思わせる。

我子共に、おもひまし給へるを、ねたしと、おもひなから、(中略)いかにしてか、あやしき名をたてて、おもひうとませむと、あんしけり　(住吉物語・九二)

よき事にこそといひて、したには、いとむねいたき事に、おもへり　(同・九五)

このもとは已に故母宮の在世当時にあって、継母は母宮より先に中納言と結婚したようであるが、父が諸大夫で勢力はあるものの血筋が劣り、また一時中納言の心が母宮に移り、その姫君をも傷いたので、母宮を嫉み憎んでいたのであろう。それが母宮の死後は収まっていたが、姫君が成長するに及び、中納言の姫君に対する扱いを見て、また姫君が入内したり、宰相と結婚したりすると自分の娘たちよりも出世になるということもあって嫉み腹立つようになる。そこには血筋が劣っているにも拘らず自分や娘のことを中心に考えて、あえて優位に立とうとする身勝手と無分別があるのである。

左近少将の事にしても、もとはと言えば中将君は内緒で事を運び、守の娘の物まで取って準備したのだから、それは継母の振る舞いに似ていると言えよう。逆に言えば、このように無理やりに中君

を頼り、さらに一層困難な薫との結婚をはかることは継母と同類の低い身分・素姓の者（継母は諸大夫の娘、中将君は常陸守の妻）という条件があってはじめて可能だったのである。ただ継母の場合は血筋の優る姫君を嫉み腹立つのであるが、中将君の場合は劣ると見ていた守や少将から侮られてそれを見返してやろうとするのであって、そこにこの母娘の立場の複雑さがあった。また継母がその低い素姓とひきかえに持っていた財力（父が「時めく、しよ大夫」である）は、ここではもっぱら常陸守のものであった。

二条院で匂宮を覗き見た中将君は「織女ばかりにても、かやうに見たてまつり通はむは」（東屋・六・二五三）と思い、このように素晴らしい匂宮と連れ添っている中君の幸せを羨む。このことは今までの彼女の考えを変えて、思い及ばなかった薫との結婚を受け入れる契機にもなった。そして中君に我が身の口惜しさを訴えて浮舟をまかせたいと一方的に頼むのである。

この君はただまかせきこえさせて、知り侍らじ」など、かこちきこえかくれば、げに見苦しからでもあらなむ、と見給ふ。

（東屋・六・二五八）

次いで薫を覗き見た彼女は同様に「天の川を渡りても、かかる彦星の光をこそ待ちつけさせめ」（同・六・二六二）と思い、前に少将を立派だと思ったりしたのを悔しいとまで思うようになる。ここに至って彼女は今までの考えを根底から変えて、薫との結婚を受け入れることにする。そして中君に女の身の持ち方の難しさを訴えて、相手の身に余ることを迷惑も顧みず頼むのである。

それもただ御心になむ。ともかくも、おぼし棄てずものせさせ給へ」ときこゆれば、いとわづらはしくなりて、「いさや、来し方の心深さにうちとけて、行く先のありさまは知りがたきを」と、うち歎きて、ことに物ものたまはずなりぬ。

（同・六・二六三）

このことは、住吉物語ではむしろ継母が姫君の許に少将（侍従）の文をもたらした筑前という女を語らって、少将を自分の腹の三君に通わせることと似ているであろう。少将の本当の相手は宮腹の姫君だったのであり、身分的にも少将は右大臣の子で「いまの后の、御せうと」として継母腹の三君とはふさわしくない。こうしてこの結婚は、当然少将と姫君との結びつきにとって大きな障害となるのであるが、一方それは継母にとっても不幸な結末を招き寄せる出発点になったのである。継母はなおも姫君の入内、宰相との結婚に対して妨害を加えようとし、かえって自らに不利な情勢を作り出していく。そして最後は三君から少将を取り返されるという致命的な打撃を受けざるを得なくなるのである。

中将君の場合も浮舟と薫との結婚は、薫にとっては本来中君こそふさわしい相手であったこと（これは中将君の知る由もないことであるが）、薫は六条院の子で権大納言右大将、明石中宮とは姉弟の間柄にあり、しかも今上の女二宮を得ていることなどから到底ふさわしくなかった。この無理な結婚は言うまでもなく後の匂宮事件を引き起こす根本的な原因だったのである。そしてその時浮舟が薫と匂宮のいずれとも決めることが出来なかったのは、先に中将君が二人のいずれをも素晴らしいと思ったことと深く関わっていると言えよう。左近少将の事件が浮舟の身分を痛切に思い知らせるものであったにも拘らず、中将君は少将など比較にならない薫との結婚をはかる。これは先に述べたように住吉物語では継母が四位少将を欺

いて三君の婿にしたことにあたるが、浮舟物語で順序を変えてそれを左近少将の事件の後に置いたのはその困難さを際立たせるためであったろう。

住吉物語の継母は姫君を迫害し不幸な境遇に陥れるが、物語の構成上から言えばむしろ姫君の最後の幸福に寄与している面がある。姫君が少将と結ばれることは、少将が已に三君と結婚している以上、継母と三君は勿論、父に対しても到底許されることではなかった。それをあえて二人が結ばれるためには、継母が、姫君と結婚するはずであった少将を横取りしたのを初めとして、姫君の入内のときに中傷を加えて妨害したこと、さらに宰相との結婚を壊すため主計頭に取らせようと計略したことなど、次々と読者の反感を買うことを企て、その結果姫君の側にとって情勢が好転していく必要があったのである。特に最後の主計頭の事件はそれがあまりに悪辣であるため読者に継母に対する悪感情を決定的に抱かせるのに充分であり、形勢は完全に逆転する。こうして継母は姫君の側の秘密を全く知ることなく、結果的には二人が結びつくことを助けていることになる。姫君が少将と結ばれるためには継母との関係を断ち切る以外になく、実にそのために今までの苦難があったのだとも言えよう。姫君は住吉で少将と逢った後もそれが心を合わせてしたように思われるのを憚って長い間都には知らせないのである。

中将君は左近少将を婿にしようとしたことを初めとして、浮舟を中君に預けたこと、そして薫との結婚を決めたことなど、次々と浮舟の行末を案じて手を打つのであるが、それが結果的には浮舟にとって抜き差しならぬ情況を作り出していく。特に薫との結婚を決めたことはそれがあまりに不釣り合いであったため、後の匂宮事件を必然的なものにする。こうして中将君は浮舟の破局への道を知らないうちに開いていくことになったのである。そこに住吉物語の継母の場合と同じように教訓的意味も求められるが、やはり浮舟の数奇な運命と悲劇を必然的に導き出してくる役割を中将君が持たせられていると見るべきであろう。そして他ならぬ中将君がそのような役割を持ち、浮舟にとってそれが避けがたいものであったところにその深刻さがあったのである。

故八宮は生前に浮舟を認めなかったことによって浮舟の世俗的な幸福の道を閉ざし、その出家という結末に重要な関わりを持つ。そして中将君が故八宮の処置に抗し、あえて宮家の姫君としての処遇を求め、それが結局失敗する外はないというところに浮舟の悲劇の根源が明らかになる。それは故母宮の遺志が姫君を幸福に導いていく住吉物語とまさに対照的であって、浮舟物語はきわめて現実的基盤からそれを否定的に捉え直したものであると言えよう。

また中将君は住吉物語の父中納言的な面と継母的な面とを合わせ持った人物として、浮舟の破局と出家とに重大な関わりを持つ。浮舟にとって匂宮事件はそれ自体の深刻さはもとより浮舟の唯一人の親にも背くものであり、そのような危機をもはらみつつ匂宮事件は進行するのである。しかしそれはもとはといえば中将君が故八宮の処置に反したことによっているのであって、それが避けられないものであったところに浮舟の悲劇の深さがある。浮舟物語は、住吉物語の人物設定の方法を継承しながら、より集中的に浮舟の置かれている情況の深刻さを浮かび上がらせ、次第に浮舟を破局から出家へと追い込んでいく。このような浮舟をとりまく人間関係、特に母と

の関係はその出家のときにあたっても改めて問題にならざるを得ないのである。

注1　古本を基本的には現存本と余り違わないと見る立場からその内容を考察されたものに、堀部正二「新資料による住吉物語の一考察」(「中古日本文学の研究」所収・昭和十八年刊)、清水泰「古本住吉物語の考察―異本能宣集祭主輔親卿集による――」(平安文学研究第二十三輯・昭和三十四年七月)、小木喬「鎌倉時代物語の研究」(昭和三十六年刊)があり、さらに古本独自の内容の考察をおし進められたものに、友久武文「住吉物語諸本における矛盾の一様相」(国文学攷第四十一号・昭和四十一年十一月)、石川徹「古本住吉物語の内容に関する臆説」(中古文学第三号・昭和四十四年三月)などがある。また源氏物語の玉鬘巻などとの関連にもふれて古本の内容を考察されたものに、上坂信男「物語序説」(昭和四十二年刊)、山口博「王朝歌壇の研究村上冷泉篇」(同年刊)、藤村潔「源氏物語に見る原拠のある構想とその実態」(藤女子大学同短大紀要第九号第一部・昭和四十七年一月)、「住吉物語と源氏物語」(同誌第十一号第一部・昭和四十八年十二月)がある。そして古本と現存本の違いを重く見る立場から古本の内容を考察されたものに、清田正喜「住吉物語の考察(三)―いわゆる古本について――」(西南学院大学文学論集第一巻第二号・昭和三十年三月)、市古貞次「中世小説の研究」(昭和三十年刊)、桑原博史「古本住吉物語から現存本へ」(「中世物語研究―住吉物語論考」所収・昭和四十二年刊)などがある。

注2　光源氏の須磨流謫については石川徹「明石の上」(源氏物語講座第四巻・昭和四十六年刊)で、玉鬘の流浪については、注1であげたものの他にも三谷栄一「源氏物語における物語の型」(同講られ座第一巻・同年刊)でふれられている。

注3　中将君という人物の重要性については秋山虔氏が「浮舟をめぐっての試論」(「源氏物語の世界」所収・昭和三十九年刊)で指摘されている。また中将君が浮舟の運命に深く関わっていることについては篠原義彦氏の「中将君の問題―浮舟の運命との関連においてー」(高知大国文四号・昭和四十八年十二月)がある。

注4　源氏物語本文の引用は、日本古典全書本により、その巻数・頁数を示す。以下同じ。

注5　三田村雅子「『李夫人』と浮舟物語―宇治十帖試論―」(文芸と批評3―7・昭和四十六年十月)でこのことにふれられている。

注6　住吉物語本文の引用は、流布本系といわれる藤井博士蔵写本(横山重校訂「住吉物語集(本文篇)」所収)により、その頁数を示す。

注7　これは住吉物語で継母の偽言によって入内が中止になって侍従と姫君が歎くところで、「侍従さはきて、ひめきみに、聞えあはせて、母なからむものは、世になからふましき事にそとて、ふたりなから、ひきかつきて、うつふしなから」(九四)とあることを思い起こさせる。

注8　注1であげた友久氏の論文では、「つまり、姫君が入水しようとした場面があり、その近因としての主計頭、遠因としての妻争いな場面の存在が考えられると思うのである。(中略)共に姫君の血続きである「侍従と少将」は、侍従を主役に、さほど深刻でなく対立したとまでは予想が立つと思うのである。」と述べ

られている。

注9　同じく友久氏の前掲論文に、「『侍従』は真銅氏本によれば、中の君の腰を結った「中納言のおちにてをはします、さいしやうにてをはする人」の子供である。(中略)もう一人の「蔵人少将」は、「さへもんのかみの御子（真銅氏本）」であるから、姫君とは異腹の兄妹の関係になる。」という指摘がある。

注10　このことについては、別の立場から上坂信男「古代物語の研究」(昭和四十六年刊)でとりあげられている。